令和３年度第１回中野区総合教育会議

１　日　　時　　令和４年（2022 年）１月２１日（金）　　開会：１１時００分
　　閉会：１１時５８分

２　場　　所　　区役所７階第８・９会議室

３　出 席 者　　（構成員）
酒井区長、入野教育長、伊藤教育委員、岡本教育委員、村杉教育委員、田中教育委員
（関係職員）
白土副区長、横山副区長、高橋企画部長、海老沢総務部長、青山子ども教育部長兼教育委員会事務局次長、小田子ども教育部子ども家庭支援担当部長兼教育委員会事務局参事（子ども家庭支援担当）、堀越企画課長、浅川総務課長、濱口子ども教育部子ども・教育政策課長兼教育委員会事務局子ども・教育政策課長
（事務局）
総務部総務課職員

４　議　　題　　中野区教育大綱に盛り込む内容について

５　傍聴人数　　６人

６　議事経過

【午前１１時００分開会】

［総務部長］

それでは皆様、ただいまから令和３年度第１回の中野区総合教育会議を開催いたします。

司会を務めさせていただきます総務部長の海老沢でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

教育委員の皆様には、お忙しい中ご出席いただきましてどうもありがとうございます。

前回の中野区総合教育会議は、令和元年１０月に「中野区教育大綱等について」を議題として開催した会議でございました。これまでの間、新たに就任された教育委員の方もおられますので、まず総合教育会議の法律上の位置付けと会議の運営方法を定めました「中野区総合教育会議の運営について」につきまして、総務課長からご説明申し上げます。

［総務課長］

それでは総合教育会議について、概要をご説明申し上げます。

総合教育会議でございますが、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第１条の４の規定に基づく会議でございまして、区長及び教育委員会によって構成されるものでございます。同法律では、地方公共団体の長は教育基本法に定める基本方針を参酌しつつ、地域の実情に応じた教育等に関する総合的な施策の大綱を定めるものとしておりまして、これが教育大綱でございます。この大綱を制定・変更するときには、総合教育会議において協議するものとされておりまして、これがこの会議の主な目的でございます。そのほかに重点的な教育施策や、緊急の場合に講ずる施策について、区長と教育委員会の事務の調整を行うこともございます。

なお、本法律では、総合教育会議の運営に必要な事項は、総合教育会議が定めるとしてございまして、これを定めた事項がお手元の資料「中野区総合教育会議の運営について」でございます。本日もこれによりまして、会議を運営させていただきます。

以上、総合教育会議の説明でございました。

［総務部長］

それでは本題に入ってまいりますので、次第をご覧いただきたいと思います。本日の議題は、「中野区教育大綱に盛り込む内容について」でございます。お手元に配付いたしまし

た資料ついて説明した後に、協議をお願いしたいと考えていますので、よろしくお願いいたします。

進行の仕方といたしましては、まず初めに「１　前回の総合教育会議」について、担当の企画課長からご説明いたします。その後「２　教育大綱の改定に向けて」及び「３　今後の中野の教育のあり方について」、区長から説明の後、今後の中野の教育のあり方を中心にご協議いただければというふうに考えております。

それではまず「１　前回の総合教育会議」について、企画課長から説明をお願いいたします。

［企画課長］

それでは私のほうから、前回の総合教育会議についてご説明させていただきます。前回の総合教育会議は令和元年１０月２５日に開催してございます。

前回は、まず区長から中野の教育の目指す人物像といたしまして、子どもたちに身につけてもらいたい３つの力、多様性への寛容さ、未来を切り開く力、多様な協働と協創についての説明がございました。

これに対しまして、教育委員の皆様からは４つほどご意見をいただいております。１つ目は、中野で育って中野を愛してほしいというような表現が入ると、より中野らしさが出るのではないか。２つ目は、多様性への寛容さにつきましては、むしろ子どもたちにとっては、そこから学んで行動できるような人のほうがよいということ。あと、３つ目といたしまして、「知」「徳」「体」の中でも、教育には健康な体づくりというものも必要ではないかというご意見。最後４つ目は総花的なものではなく、中野の教育はこれなのだというようなことをアピールできたらいいのではないかというご意見をいただいております。

また、「区長が考える中野の教育」と題しまして、今後力を入れていきたいことを４点挙げてご議論をいただきました。

１つ目は、多様性（ダイバーシティ＋インクルーシブ）を尊重し、自己肯定感を育む心の教育です。ユニバーサルデザインの考えに基づきまして、一人ひとりが安心して学べる環境を構築していくことや、その個性や特性に応じて「支え・支えられる」教育を実践していくこと。

２つ目は、地域に支えられて育ち、地域に貢献できる子どもを育む教育です。区内の資源を十分に活用し、地域全体で学ぶ環境を整備し、地域活動に生かす教育を一層推進して

いくことや、学校・家庭・地域や保幼小中の連携を一層推進するほか、民間が持つノウハウやアイデアを最大限に活用し、教育を支える地域の力をさらに高めていくこと。

３つ目でございますが、豊かな情緒や個性、価値観を育み自ら表現できる教育です。幼児期から学齢期にかけまして、伝統・文化・芸術など「ほんもの」の文化に触れることで、豊かな情操を養うとともに、それを自己表現できる教育を推進していくこと。

最後４つ目といたしまして、時代の変化に対応した教育です。「生きる力」を身に付ける教育の充実、教育環境のＩＣＴ化によって教育の質の向上を図っていくこと、一人ひとりの社会的・職業的自立に向けて、基盤となる能力や態度を育むキャリア教育を推進していくこと。

これらのとおり、多様性の視点や体験の重要性などについて、ご意見をいただいております。

以上が前回の総合教育会議でご議論いただいた内容でございます。

［総務部長］

ありがとうございました。ただいまの説明の内容などにつきまして、質問がございましたらお願いいたします。

それでは特にないようですので、続きまして２番、「教育大綱の改定に向けて」及び３番、「今後の中野の教育のあり方について」、区長から説明をお願いいたします。

［区長］

よろしくお願いします。今、前回の総合教育会議での議論の紹介がありました。この間新型コロナウイルス感染症の発生がありまして、２年と少したってしまいましたけれども、基本的に令和元年に行った会議での課題認識と、そんなに変わっているということではございませんので、これも踏まえながら、今回の総合教育会議で議論していきたいと思います。

まず最初に、大綱の改定に向けてということで、令和元年の総合教育会議の後の大きな変化として、区政の基本指針である基本構想を改定いたしまして、更にこの目標実現のために基本計画を策定して、今、取組が始まったところでございます。

基本構想の理念の中に「誰一人取り残されることのない地域社会」というワードがあるのですけども、この具体的な中身を地域社会とか、スポーツの関係の中に落とし込んでい

く必要があるだろうなと私は認識しております。

新型コロナウイルス感染症の拡大、また、ここにきて新しいオミクロン株による感染が拡大しております。学校も今、学級閉鎖や学年閉鎖まであると聞いています。そんな中で、新しい生活様式に対応した教育環境の整備というのも、当然、今、求められているということでございます。

また、新しい学習指導要領がスタートし、「生きる力」という言葉が使われておりますけども、この「生きる力」を育むという理念、それが今、求められているということでございます。

これらの背景を元に、新時代に向けた中野の教育を考えていく必要があると考えております。

前回の教育委員の皆様からのご意見の中にもありましたけれども、総花的なものではなく、中野という特徴を捉えた中野らしい教育大綱というのが、私も目指すものだなと思っておりますので、そこも意識した上で議論をしていただきたいと思います。

次に、今後の中野の教育のあり方についてということで、先ほど４つの視点について前回の総合教育会議の内容の紹介がありましたけれども、改めて今回私から中野の教育が目指すものとして、基本構想の「誰一人取り残されることのない」という理念を踏まえた上で、以下の３点を挙げたいと思います。

１つは、地域全体で子どもの「生きる力」を育む教育を目指すということ。そしてもう１つは、多様性を尊重し、自己肯定感を育む教育ということ。そして最後に「すべての子どもに、一人ひとりに応じた学力、体力向上を目指す教育ということを挙げさせていただきます。

この「すべての子どもに、一人ひとりに応じた学力、体力」という言葉でございますけれども、これは基本構想の中の「誰一人取り残されることのない」という理念を踏まえると、「一人ひとりに応じた」という言葉には、子どもたちが学力的に落ちこぼれることなく、しっかりと学校教育の中で力をつけることができるということも、意図として入っているということを、ご理解いただければと思います。

その他にキーワードとしていろいろ掲げてありますけれども、このようなキーワードのもとに教育が目指すものということで、皆さんにご提示したものでございます。

今日はこれを踏まえて、皆さんから１つ１つについてご意見・ご感想などを伺えればと思います。よろしくお願いします。

［総務部長］

それでは、協議のほうに入らせていただきたいと思いますが、以上の区長からの説明を踏まえまして、「中野の教育が目指すもの」のうちの３点について、一つひとつに区切って協議をいただきまして、その後、３つの視点について協議いただくということで、進めてまいりたいと考えておりますのでよろしくお願いします。

それでは１点目でございますけれども、地域全体で子どもの「生きる力」を育む教育ということを目指すものとして提案させていただきました。その点につきまして、様々ご意見をお伺いしてまいります。

いかがでございましょうか。ご発言がございます方、よろしくお願いします。

［岡本委員］

前回の総合教育会議でも議論があったかもしれないのですが、私がこの地域全体で子どもの「生きる力」を育む教育という文字を見たときに感じたことをお話しさせていただきます。

地域と一口に言いますけれども、もちろん皆さんよくご存じのとおり、活性化しているところもあれば、なかなか若い人が入ってこずに難しい実態になっているところもあると思います。そこに対して、一様に学校が地域にリソースを貸してくださいと言うと、難しい現実も正直あるのではないかと思っています。

そもそも中野の学校教育は、中野にとって子どもにどうなってほしいか、という視点もあっていいのではないかと思いました。子どもの能力開発の上で、子どもが自分の人生を豊かに生きるための教育というのももちろん大事なのですが、それとともに中野区にとって子どもにどうなってほしいのかという視点を考えたときに、今はただ地域に資源を学校が貸してくださいと言うだけにとどまっているのではないかという気がしています。

一方通行なのですよね。もちろん地域にとっては大事な学校であり、大事な子どもですから、助けてはくれますけれど、ただリソースをとっているだけに終わっていないでしょうか。地域の活性化ということを考えたときに、地域の中の学校として、子どもたち、学校教育に、一方通行ではなくて、学校があることによって地域が活性化する、そういう循環になっていく方向に考えたいなと思いました。双方向の取組をすることで、子どもはもちろん、ひいてはその保護者たちも、もっと地域にコミットできる機会が増えていくこと

になると思います。

例えば、小学校で地域調べなどを行いますが、もちろんそこでの学習はあるのですけれども、ただ地域のことを知るだけ、あるいは地域行事のお手伝いに入るだけにとどまっているような気がします。そうではなくて、もっと子どもが参画していく、地域の大人と一緒に行事などをつくっていく、そういった取組をしている学校もありますし、そういうより子どもが参画できる場面をつくっていくことが、ひいては地域全体で子どもの「生きる力」を育むことにつながっていくのではないかと思いました。

［伊藤委員］

私が感じたイメージは少し岡本委員とは違っていて、「生きる力」というところに注目いたしまして、今、非認知的能力ということが盛んに言われていますけれど、従来型の学校知などとも言われたりする知識を基本とする形の学力ということ、そしてそれを支えるような認知的な能力ということだけではなくて、自分の感情を自分で捉えて表現したり、ほかの人の感情を受け取って、うまくコミュニケーションしたり、あるいはなかなか大変な状況の中でもあきらめなかったり、落ち込み過ぎなかったりしながら、活動をクリエイティブに行っていくような能力は、単なる教育ではないと考えられ、そういう非認知的な能力も含めて「生きる力」ということが言われています。

どうしても学校では教科書の内容をやらなければいけないので、多様な体験をする機会が少なくなってしまうのですが、地域にはそういった総合的な力を学ぶチャンスがある、学ぶ場があるということかなと思っていて、学校が地域の力を借りるというよりは、私のイメージとしては、地域が子どもを受け入れていろいろなことを子どもたちが地域でできる、多様な形の学びができるということをイメージしました。

今思い出しましたのは、自分も中野で育ちましたけれど、小学校、中学校の頃にすごくたくさんのボランティア活動を地域の中でさせていただきまして、その中で地域の保護者でもない、誰かのお父さん、お母さんでもない、本来だったら関係がないかもしれないような方々がボランティア活動を認めてくださったり、そのボランティア活動にいろいろな形で協力してくださったり、そういった体験も今、私の大きな財産になっているなと思いますので、様々な活動を子どもたちが地域全体でできるという、そういったところまで、学校教育だけではなくて、地域全体で子どもたちを育んでいくということではないかと理解いたしました。

そういうことで言うと、いろいろな方がお住まいになっている中野という特徴も生きるのではないかなと感じました。以上です。

［田中委員］

最初に「生きる力」を育むというのが出てきたのは、すごくいいことだなと思いました。先ほど区長が背景の説明の中で、新型コロナウイルス感染症のこともいろいろ言っていましたけれども、子どもたちが自分で、みずから健康を守ろうとする行動をとったり、あるいは周りの人の健康を気遣う行動をとったりするというのは、まさにその「生きる力」が必要だと思うので、そういう意味で、この教育大綱の最初にこれが出ているというのはすごくいいことだなと思いました。

もう１つ、地域全体でということですけれども、これは教育大綱なので、地域全体というよりは地域と学校が連携するというか、相互に関わり合ってというような表現のほうが、先ほど岡本委員も話されていましたけれども、より教育大綱としては具体的な表現になるのかなと思いました。

暮れに出されたこども政策の推進に係る有識者会議の報告書の中でも、地域資源と学校とがお互いのプラットフォームを共有するということも書かれていますので、そのようにしたらより読んでくださる方に、分かりやすい表現なのかなと思いました。以上です。

［村杉委員］

私は小児科医の立場として、中野区の子どもたちが心身ともに健康に、健やかに成長していくことがとても大切だと思います。

この「生きる力」についてですけれど、学校教育の中でがん教育や性教育を通して、健康に対する知識を身につけて、大人になっても健康な体を維持できるような、そういう「生きる力」というのを身につけることがとても大切だと思います。

また、先日学校訪問させていただきましたときに、小学校の２年生のクラスだったのですが、九九の授業に民生委員の方たちが参加されて、３、４名いらして、子どもたちの授業を支援していらっしゃいましたが、この地域全体で子どもを見ていくということは、とても大切なことだと思います。

［総務部長］

それでは１点目については終了しまして、次に２つ目、多様性を尊重し、自己肯定感を育む教育ということについて、ご意見をお伺いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

［田中委員］

イメージとしては、多様性を尊重することで自己肯定感が育まれるという、そのようなイメージなのでしょうか。結局、自己肯定感というのは、自分がしっかりする中で、周りの多様な人たちも受け入れられるようになるという、その辺が並列なのかどちらが先なのかというところが、はっきり自分の中で理解し切れないのですが、そのところは、この文章ができた過程の中で何か議論があったのであれば教えていただきたいと思います。

［区長］

田中委員がおっしゃった順序はあまり意識していなくて、並列的な感じですね。多様性が中野の特徴だというふうに考えていて、一方で自己肯定感という言葉もキーワードとして大切だと思いまして、これをまとめたというイメージで、順序は、意識していなかったです。

［岡本委員］

今の点と関連してなのですけれど、多様性が尊重されていないから自己肯定感が生まれていない子もいるとは思います。でも、それだけがイコールになるのは、漏れてしまうところもあるかなと、今、お話を伺って思いました。

自己肯定感については、昔から言われている課題ですね。国際調査でも、日本の子どもや青少年の自己肯定感は低いとされています。しかし、生まれたころから日本人だけ自己肯定感が低いなんていうことはあり得ないわけで、だとしたら、日本人が生まれ育っていくうちに自己肯定感をすり減らされてしまっている環境があるのだと思います。その環境は何か。それが例えば、多様性が尊重されていない場がどんどんでき上がってくるからそうなってしまっているのかもしれないということは１つ言えるのではないかと思いました。

どういう場で自分がすり減らされているのかというのは、大人が想像してみてもわからないので、いっそ子どもに聞くのはどうかと思います。アンケートをとって、あなた、今、自分らしくいられていますかと聞くのです。自分がこの場で、家庭も地域も学校もですけ

れど、自分らしくいられていないとすれば、それはなぜだと思いますか、ということを聞いてみることは１つの方法ではないかなと思いました。そういうこと自体が子どもたちに対して、また区民に対しても、中野は多様性を尊重していますよ、子どものことを考えていますよというアピールの１つにもなるのではないでしょうか。

大学入試など、一学校や一家庭では解決できない社会的な課題で自己肯定感をすり減らされている場面もあるかもしれないです。中野はどんな子どもも大事にしていますよとＰＲしていくのも大切なことだと思いました。

［伊藤委員］

私も最初に拝見したときは、多様性と自己肯定感という違った事柄が２つ並んでいるように見えてしまって、どういうことかなと考えたのですけれど、これは他者理解と自己理解なのかなと思っていました。他者を理解する、他者の多様性を理解してお互いに、また教員や周りの大人、地域全体が他者を理解することで、いろいろな多様性が受け入れられて生かされるという他者理解と、そういったことも含めて自分自身のこともきちんと理解して、受け入れられながら自分のことも受け入れていくというような他者理解、自己理解という１つの大きなすばらしい理念が入っているのかなと受け取りました。

先ほど地域全体でということで申し上げましたが、地域の人が本当に子どもたちのことを見守りながら、関心を持ちながら子どもを育んでくださるような、そういった多様な大人たちが多様な見守りをしてくれる環境の中で、子ども自身も他者を理解しながら、自己を理解するという形で考えると、何か根本的な中野らしい理念というのが立ちあらあわれてくるといいなと思いました。

もう１つ、付け加えさせていただくと、日本人が自己肯定感が低いという説は、調査方法の限界と、社会の構造も含めた人々の生きる感覚の成り立ちが根本的に違う中で、学問的にはどうなのだろうと、随分前から言われているのです。

そういう問題点も含めて、他者理解、自己理解といったような、わかりやすい表現に工夫することが考えられると思います。他者理解と自己理解でなくてもいいのですけれど、つながりが見えやすい形の表現を考えるとよいと思いました。

［区長］

自己肯定感という言葉自体は、学問的には定義が微妙であるということをおっしゃって

いるのですね。

［伊藤委員］

自己肯定感の定義自体はきちんとしたものがございますが、関連の概念には、自己効力感とか、自己斉一性、本来感といったような様々な概念があります。自己肯定感というと、日本人だけ低いという調査結果に引っ張られてしまうのです。

［村杉委員］

私も、自己肯定感ができていくうえでは他人から認められるということがとても大切なことだと思いますので、認める教育というのも大切だと思います。

区長がおっしゃる多様性というのは、どのようなことをイメージして考えられているのか、教えていただければと思います。

［区長］

１つは中野の特徴として、外国人も様々な国から大勢来ているということがありますし、地方出身者の方もたくさん住んでいます。また、ＬＧＢＴの方が割と多いというのも多様性の１つだと捉えていますし、また、自分と違う人たちがいるということに対して、とても寛容であるというのが、中野のまちの特徴だと思っています。多様性という言葉は、いろいろ解釈はできると思いますけれど、１つは寛容という意味を含んでいると思っています。

もう１つは、多様性と自己肯定感の関係から思うのですが、自分を大切にするから人も大切にできるのです。多様性の中で自分も１人の個性だし、他人もそれぞれ自分の個性を持っていて、それをお互い認め合うということの関係性を大事にしたいなと思うのです。

［岡本委員］

お話を伺っていて、多様性というのは、自己肯定感ですけれども、そうするとことさら言わなくてもいいのかなという気も段々してきました。今、区長おっしゃったように、自他の個性を認めることができていけば、それで肯定感、人によって受け止めは違いますけれど、自分の生き方は自分で決めることができればいいのかなと思ってきました。

もちろん、人に認めてもらいたい場面もありますし、自分１人で満足していればいい場

面もあると思います。人の生き方を尊重して、それを邪魔しない、学校教育でもそういうことができていけばいいのかなと思いました。

［伊藤委員］

多様性ということに関連しては、個人的なエピソードですが、子どものころ、「わたしたちの中野」という副読本で学習したことをまだ記憶しています。地域、区によっては地場産業という形で、ある特定の職業の方が多いということがありますが、「わたしたちの中野」を使った学習をしたときに、中野区も一部はそういう地域があることを知りました。でも、あまりそれが濃くないことに一抹の寂しさというのも感じたのですね、子ども心に。それがその後、中学校などに入ると、たくさんの子どもたちが違う学校から来るという中で、本当にいろんな職業のお宅のお子さんがいらっしゃって、世の中はこんなにたくさんの職業があって、それぞれに生活の成り立ちが違うのだということを友達との会話の中で知りました。

それは、他者理解とか、今に至る自分の職業的な専門性のベースにもなりました。そうしたことから、「多様なんだよ」ということを学校の授業で習うよりも、本当に多様な人たちと出会えるというのが、中野のすばらしさだなと思ったのですね。ぜひ、多様性の中で学ぶということを盛り込んでいただけると、中野らしさが表現できるかなと思います。

［田中委員］

この多様性を尊重するというのは、本当に、中野では体験できていいことだと思うのですけれども、多様性を尊重したことで止まってしまうと、かえって、あの人は自分とは違う人だというところで終わってしまいかねません。多様な人と一緒に地域の一員として暮らしていくという、多様性を尊重した一歩先のことを少し明確に伝えられるといいかなと思います。今、お話を伺って、中野の特徴である様々な外国の人や地方の人たちと一緒に地域の中で暮らすということが、子どもたちの「生きる力」につながっていくというような意味合いが込められているのだろうと思ったので、そういうふうに明確にするとよいのではないかと感じました。

［区長］

多様性ということで言えば、多文化共生という言葉が言われますけども、この多文化共

生というのは、最初は日本人と仲よくしてお互いちゃんと認め合って生きる、程度の意味だったのが、今は外国人の方も日本に来て地域社会で活躍できるものを目指すべきだという、多文化共生２．０という考え方が出てきています。私もそれをイメージしていて、そこを目指したいという気持ちがありますので、今、田中委員がおっしゃったことは理解できます。

［総務部長］

それでは時間の都合ありますので、３つ目に進めさせていただきたいと思います。

３つ目でございますけれども、「すべての子どもに、一人ひとりに応じた学力、体力向上を目指す教育」これを目指すものということでございますが、これについてご協議をお願いしたいと思います。ご意見がありましたらよろしくお願いいたします。

［岡本委員］

伊藤委員が最初におっしゃったように、学力という言葉は本当に人によってイメージが様々です。すごく狭く言えば、入試にクリアするのが学力であると言う人もいると思いますし、他方で、その人がよりよく、自分らしく生きていくために力をつける、トータル的なものが学力であると今は言われています。ですので、学力という言葉は悪いわけではないのですが、中野区が子どもにつけたいと思っている学力とはこういうものですよということまで踏み込めたほうがいいのだろうと感じました。

体力については、健康な生活を送るためにもちろん必要なのですけれども、中には運動嫌いにつながってしまったりするような場面もあったりするので、そこは運動やスポーツを楽しめるような授業なり地域スポーツなりにしないといけない、そういった観点もあってもいいのかなと思いました。

学力も体力も、文部科学省や、東京都が１つの指標として考えていますけれども、それに縛られずに、中野はこれを大事にしているから、中野はこれでやっていくし、進んで行くと、バッと言い切ってもいいのではないかと思っています。

［区長］

学力、体力というのは、もう問わなくてもいいということでしょうか。

［岡本委員］

いえ、国の学力調査などにより、学力や体力が上がった、下がったと比較するだけではなくて、「中野はこれをやっています」とはっきり言えるものがあればそれでよいのではないかなと思います。結果的に数値は上がるかもしれません。

［伊藤委員］

違う観点から言いますと、私はこの３点目を見て「一人ひとりに応じて」というところはすばらしいなと思う反面、子どもだけがまとめられているような感じを受けました。本当に子どもたちが楽しく学んで、できるようになって「分かった」。そしてそれが応用できるようになる、そういった授業をきちんと学校が提供しているのかというところが問われていると私は思っています。世の中何となく、子どもはみんな誰もが自分らしい学力、体力を身につけて、向上させなければいけないんだよと、子どもの責任にしてしまっているような気がして、むしろそれを確かに子どもが学べるような学校環境、授業、教育活動というものが保障されているという、そういうことが伝わるような文言はないだろうかと、そういう気がいたしました。

［区長］

この３つの点は、中野の教育が目指すものということで、それに区は責任を持って取り組んでいくということです。

［伊藤委員］

さきほど学力テストの話がありましたけれど、狭く考えてしまうと、学力テストをして、点数が低いとその人たちがよくないという見方がされてしまったりすることがあるので、そうではなくて、教育活動のほうに力点を置くんだというようなことがあったほうがわかりやすいかと思いました。

もう１つ、違うことを申し上げますけれど、様々な大学で教えてきましたが、自分で考えて行動する力、分からないものは分からないと受け止めながら、自分なりに考えたり、自分で次に何をしたらいいかを考えてくというような、総合的な学びの力が大学は問われますので、その点で行き詰まってしまう、いわゆる学力点数のいい人たちというのは、やはり悲しいかな一定数おられるのですね。

そうしたことから「生きる力」が大事だと思いまして、学力、体力という言葉を使うと、狭い学力テストの点数とか、体力テストの点数のことを頭に描いてしまうような気がします。結果としての学力向上、体力向上をただ求められてしまう雰囲気を払拭し、いろいろな幅の広い子どもの力を育成して、そしていろいろな子どもたちがきちんと力をつけられるような授業を確実に行っていく、そうした勢いが表現できるといいなと思いました。

［区長］

端的に言って、詰め込み型、暗記型の教育はもう古いということですね。

学力、体力という言葉がストレートに出てくると、誤解を生むのではないかというご意見が２つ続きましたね。

［田中委員］

私は、この「一人ひとりに応じた学力、体力」という言葉は、かえって区民に分かりやすいかなと思いました。先ほどいろいろな話が出たことは危惧する一面ですけれども、私としてはこの「一人ひとり」という部分というのは、子どもはすべての子が伸びしろを持っているということだと思うのです。ですから、そういったところを少しでも伸ばすという意味の向上と捉えれば、私はいいのかなと思っています。

私は歯科医師なのですが、例えば障害を持っていて食事がうまくできないお子さんが、私たちが口の周りの筋肉を鍛えるトレーニングをすることで少し飲み込みができるようになったとしたら、それも１つの向上だと思うのです。

ですから、子どもたちはみんな必ず伸びしろを持っていると思うので、それを考えると、学力、体力という言葉でも、受け止める方にとっては逆に分かりやすくていいのかなという気はします。

［村杉委員］

私も、学力というと、どうしても学力テストをイメージしてしまいますので、学ぶ力とか、他の言い回しが考えられるといいなと思います。

［総務部長］

それでは時間も限られてございますので、次のテーマとさせていただきます。次に「基

本的な理念と実現するための３つの視点」ということで挙げさせていただいている３点、「家庭や地域の人財との協働による学校運営」「中野の強みや特徴をいかした学びの連続性」「特色ある学校づくりと地域活動」といった点、あるいはキーワードとしてあがっている点について、ご意見ございましたらよろしくお願いしたいと思います。

［岡本委員］

大筋は賛成です。細かい言葉の言い方で、「人財」という言葉がありますが気をつけたい言葉だと思いました。財産というのは高い価値があるものですね。そうすると高い価値がないものもあることになってしまいます。高い価値がある人は尊重するけれど、そうでない人は別に参画しなくていいよということにならないかなということが心配でした。それは地域全体を考えたときに、マッチしない言葉ではないかと考えた次第です。

もちろん学校にとって助かる人材、宝のような人たちはどんどん参画していっていただければいいのですけれども、地域全体でもっと関われるような仕組みこそ必要なのではないかなと思いました。それこそ伊藤委員が何度もおっしゃっているように、多様な人たちと関わるようにすべきであって、すぐれたことがあるから学校に関わるだけではないようにしたいと考えます。

［区長］

地域の多様な人との協働による、とかですね。

［岡本委員］

そうですね。「人財」という言葉には一定の能力があるといったイメージがあります。

［伊藤委員］

「中野の強みや特徴をいかした学びの連続性」というのが基本になってくるのかなと思っておりまして、まさに子どもたちは中野の中で学んで、中野からすべてを学んでいて、義務教育段階では特にそういうことが強いと思うのです。ですので「中野の強みや特徴をいかした学びの連続性」というのが特徴としてあった上で、それを実現している要素として、家庭や地域の人との触れ合い、社会の中での学び、またその人たちが学校にいらしてくださる、子どもたちも地域に貢献する、そういったつながりや学びがあり、最後にそう

いった中から特徴が自然に立ちあらわれてくる形での学校づくりが理想なのだろうと思っています。それをあえてトップダウン的に、この学校はこれをやりなさいといったことで作られる特色ではなくて、中野の中でも地域ごとにいろいろな特徴がさらにありますので、地域と学校が、みんなで子どもを育てる中で出てくる特徴、あるいはそうした特色が生かされるような学校づくりが進められるといいなと思いました。

［区長］

中野の中でも、更に地域の特性ということですね。

［伊藤委員］

そうですね。中野の特徴ももちろんあって、その上に、さらにその地域の特性となってくると思うのです。

［岡本委員］

伊藤委員の意見に賛成で、特色あるって、ちらっと見てもパッと目立つものという印象がありますよね。ＩＣＴ最先端のことをしています、校舎がきれいです、部活動が充実していますと、保護者はやはりそういう目で見がちですが、そうすると比較して競争させることになってしまい、それは子どもたちの為にはならないと思います。

伊藤委員がおっしゃったように、結果として特色が出ればいいのです。子どもたちにとってどういう教育が必要かを学校がそれぞれ自分たちで考えて取り組めるように、行政が支援することが大事なのだと思います。それが結果として特色となって現れる、そういう考え方に向かえばいいなと思いました。

［伊藤委員］

今、岡本委員がうまく表現してくださったのですけれど、逆に言えば、学校も、その地域のことを理解していかないと、その地域の特徴というのが学校に生かされていかないと思います。学校も地域もお互いに対等な立場で協力していく、地域の中の学校も１つの要素であるという、そういう考えの中で各学校の特徴が、段々に地域の人と一緒に自然に現れてくるように、予算などとかいろいろな点で行政が支援していくという形であるといいのかなと思いました。

［村杉委員］

中野本郷小学校の学校の建て替えのことを伺ったのですが、菜園とか緑を地域の方も入って一緒に育てるといった、そんなイメージで案がつくられていますので、今後改築する小学校に何かそういう学校の特色が出るよう工夫されていかれるとよろしいかと思います。

［総務部長］

それでは、ご意見をいろいろといただきましてありがとうございます。本日はここまでにしたいと思います。

全体を通しまして、教育委員会のほうから発言がございましたらお願いします。

［教育長］

いろいろな意見交換をさせていただいて、区長が私どもに求めるものが、共有ができたと思うのですけれど、言葉であらわすと、その想いがなかなか伝わらなかったり、ぶれたりするので、もう少しそういう面ではすり合わせていかないといけない部分があるのかなと思いました。

私は教育職だったという経歴があるので、どうしても教育の言葉で解釈しようとする側面があります。教育職の立場で見るとどうなのか、区長の想いとこれから先またもう少しすり合わせながら、どういう言葉で区長の想いを教育大綱にしていくか考えていくことが、次の段階で必要なのかなと思います。

［総務部長］

最後に区長からご発言をお願いします。

［区長］

今日のご意見を受け止めまして、次回に向けて検討を進めてまいります。本日はありがとうございました。

［総務部長］

様々なご示唆、ご発言ありがとうございました。本日の協議を踏まえまして、引き続き

教育大綱の改定に向けまして協議を進めてまいりたいと思います。よろしくお願いいたします。

次回の会議につきましては、改めて開催の通知を差し上げますので、どうぞよろしくお願いいたします。

以上をもちまして、本日の中野区総合教育会議を閉会いたします。どうもありがとうございました。

【午後１１時５８分】